横浜詩人会通信328号

2023.10.10

横浜詩人会事務局　相模原市南区新磯野 4-6-3-205　金井雄二方
発行人　佐相憲一（会長）立川市一番町 1-45-17-203
＊郵便振替　00230-0-5574　ヨコハマシジンカイ／ http://yokohamasijinkai.web.fc2.com/

第55回横浜詩人会賞決定！
佐野 豊氏『夢にも思わなかった』（七月堂）

【略歴】
佐野豊
一九八四年　相模原生まれ
二〇一八年　詩誌極微（創刊）
二〇一九年　私家版『スワン』
二〇二一年　小詩集『風』（花椿文庫）
（同年）　第一〇回びーぐるの新人
二〇二三年　詩集『夢にも思わなかった』
（七月堂）刊行

【受賞の言葉】

第五十五回横浜詩人会賞に選んで頂き、大変光栄に思います。ありがとうございます。

版元の七月堂様を始め、詩集作りに関わって下さった全ての方々に感謝しています。

私家版や小詩集を経て、『夢にも思わなかった』は、しっかりとした一冊の詩集を作るという兼ねてからの念願を叶えたものでした。

どういう詩集を送り出したいか。それをずっと思っていた日々が、今回のような結果に結びついてくれたのだと感じています。

詩集は生き物のようで、良い詩を集めたベスト盤ではありませんでした。この子にはこの子の性格のようなものがあるなと、ゆっくりと理解していきました。

具体的には妻との暮らしのなかで感じ取る、ちいさな発見から、書いておきたいものが見つかっていったことがあります。生活を大切にしなければ見えることのなかった光景を紡ぎだせたことは、詩書きとして大切な経験が出来たと思っております。詩集を編む際に最も気を付けたのは、いま書いておきたかった大切に忠実であることでした。

この詩集をお読み下さったすべての方へ、ありがとうございました。そして、詩と共に生きる私を支えてくれた妻に心から感謝しています。

贈呈式＆講演会
10月9日(月・祝)
14：00～17：00 鶴見公会堂
講演（対談）：
大石規子＆荒船健次
佐野豊詩集贈呈式
（詳細は同封チラシをご覧ください）

第55回横浜詩人会賞
選考経過御報告

選考委員長　伊藤悠子

第一回選考委員会は七月一日に行われた。選考委員は通常七名であるが、選考日直前に三上透氏が急逝されたとの報告を受け、六名で任に当たることとなった。事務局からアンケート等の結果に基づいた対象詩集十六冊が示された。候補詩集になるかどうかの判断は選考委員会に任された。

選考委員の互選で私が委員長になった。このあとは選考委員だけで話し合う。対象詩集は発行日順に高細玄一『声をあげずに泣く人よ』、野木ともみ『屋上のボール』、津田政行『峠道』、草間小鳥子『源流のある町』、豊岡良『廬山―愛の詩を書く私―』、富田和夫『にがよもぎ』、木内ゆか『あぁ　そうやって私たちは日ごと夜ごと千年先まで』、田中裕子『五月の展望台から』、藤本敦子『水の時を閉じ込めて』、池田髙明『可能が可能のままであったところへ』、立木勲『ウムル　アネ　ケグリの十二月』、川村真『We are friends』、北村紀子『夕暮れのおくりもの』、おくやまなおこ『存在の海より』、佐野豊『夢にも思わなかった』、大木潤子『遠い庭』である。

「新人」の規定について討議し確認した。年齢は問わない。既に全国的な賞の受賞歴がある田中裕子さん、及び本作で受賞している木内ゆかさんの詩集は外した。候補詩集は十四冊となった。第二回選考日に向けて推薦したい詩集を絞り込んでいくことを提案した。事務局で候補詩集が委員の元に届いているかチェックして散会。七月十二日、事務局から富田和夫さんと大木潤子さんが候補詩集になることを辞退されたと連絡があった。

八月十五日は賞決定の第二回選考委員会である。事務局から十二冊の候補詩集一覧が渡された。進行は伊藤が、書記役は光冨幾耶さんが受け持った。先ず各委員が支持する詩集をあげてその理由を述べた。それに対する意見も述べ合ってから一人三票の投票にはいった。結果は、池田髙明詩集四票、佐野豊詩集四票、草間小鳥子詩集三票、立木勲詩集三票、藤本敦子詩集二票、北村紀子詩集一票、おくやまなおこ詩集一票となった。さらに忌憚なく話し合い、二回目の投票は二票以上をとった五詩集から二詩集を選ぶことで合意した。結果は佐野豊詩集四票、池田髙明詩集三票、草間小鳥子詩集二票、立木勲詩集二票、藤本敦子詩集一票である。上位二詩集を最終候補とした。二詩集への評価を真摯に討議し終えて、一人一票の最終投票では、佐野豊詩集五票、池田髙明詩集一票となり、第五五回横浜詩人会賞は佐野豊詩集『夢にも思わなかった』に決定した。

佐野豊さん、おめでとうございます。読んでいてこの世界への懐かしさ、愛おしさが詩となって手渡されるようでした。

送っていただいたすべての詩集に感謝して、詳しくは各選考委員の選評にお任せいたします。

これからが本番

大石規子

高細玄一「声をあげずに泣く人よ」草間小鳥子「源流のある町」藤本敦子「水の時を閉じ込めて」池田髙明「可能が可能のままであったところへ」立木勲「ウムル　アネ　ケグリの十二月」佐野豊「夢にも思わなかった」を携えて選考会の席に着いた。どの詩集も個性的で捨てがたかった。一冊ごとに丁寧な議論を重ね、最終的に佐野さんが受賞となった。

選ぶことは己の批評眼を試されることでもある。常に私の中にあったのは新人賞に値するかということと、これが本当に詩といえるのだろうかということの二つだった。今回、選ばれた人は幸運だったが、詩を書く以上、誰しもが高みを目指したい。古今東西の名詩を読み直し、基本的な技術も身につけたいものだ。その上で、これが詩だと言える作品を書き続けてほしい。さあ、これからが本番だ。

選考を終えて

方喰あい子

受賞詩集、佐野豊著『夢にも思わなかった』の、呟くような詩は、日常の中にある幸せな光景が、素直に伝わってきました。「暖のとりかた」「だらんと妻が」「いっこのリンゴ」「日ひめくり」に、特に注目しました。

詩集『可能が可能のままであったところへ』は、読み応えがありました。「ひとすじの煙」は、第二次世界大戦後、村に住むようになった男と村人や子どもたちとの交流を表現する。男の死後、村のおばあさんは、「信さはここで戦友(とも)を弔っていたんずらか。」と独りごちして、著者のぼくは、「明日からぼくたちは、おじさんのことは（前半生は知らないまんま）うちわすれていくだろう、と。」、詠う。

詩集『水の時を閉じ込めて』の「素手で」の一連目、「濡れた砂に映った空をあるく」は、素晴らしい表現でした。

十二人の詩人の十二冊の詩集

谷口烏子

基準には、最も優れた新人の作品とあるが、候補詩集の優劣、新人、の判断は難しい。

受賞作の佐野豊『夢にも思わなかった』は胸をうたれる。妻との、詩との日々のなか、徐々にかわっていくぼく。丁寧に選ばれ繊細に並べられたことばたちの、その先もみたいと思う。草間小鳥子『源流のある町』は「手をふる　手をふる」はじめ重層的な構成、筆力に圧倒される。ひかる詩行に出会う喜びも。藤本敦子『水の時を閉じ込めて』は水、海、がリアルで強い。力みなく切れのいい作品が続く。立木勲『ウムル　アネ　ケグリの十二月』は大人の上質な映画を観たような読後感。池田髙明『可能が可能のままであったところへ』、津田政行『峠道』は、ずしりと腹にくる。

賞の選考は初めての経験でした。十二人の詩人の十二冊の詩集を前に、読み書き考えを続けていきたいと改めて思いました。

読者が決める優秀賞

鎮西貴信

「書く人と読む人がいる限り、読む人の側に立つのが文章の基本だ」と、ある作家が書いています。でも詩は違うようです。おくやまなおこ『存在の海より』は、観念の世界を巧みに言葉にしており、語り口が聖書に似ていて、すごいと思いました。

池田髙明『可能が可能のままであったところへ』は、印象に残る素敵な表現が随所に見られましが、佐野豊『夢にも思わなかった』の魅力には及びませんでした。

どの選者も感じたことだと思いますが、優秀な詩集を一冊選ぶということは、辛いものです。スポーツのように数値で表わせる選考基準がないからです。受け取り方次第でよく練られた作品に見えたり、でたらめな作品に見えたりします。選ばれた詩集だけが優秀なのではないということを改めて確認することができました。これは、詩を読むすべての人に伝えたいことです。

選考を終えて

光冨幾耶

選考後、詩は良いものだと改めて思った。12冊の対象詩集で、わたしが特に推したのは、佐野詩集、草間詩集、立木詩集の3冊だった。他に高細詩集、野木詩集等も印象に残った。

佐野詩集は、優しい語り口、さりげない視点、何かを強く訴えるのではなくそこにあるという詩の感覚として良い作品集であった。また一つひとつの言葉をよく練り、作品を造り上げる。

草間詩集は、物を捉える視点と描く筆力があり、豊かな詩の世界を造り上げた。多彩な方だが、一つの詩が長いのが美点でもあり、気になる点でもあった。

立木詩集は、誠実な視点と、物を描く筆力を感じた。粗削りな部分もあるが、人間の在り方と心情が伝わる詩集だった。

最終候補として池田詩集と佐野詩集が残った。池田詩集は、言葉にできないものを言葉にしようとした作品などに注目した。さらなる造りこみが欲しい。

講演『高村光太郎の戦後⇳戦後の谷川俊太郎』

中島悦子

Ⅰはじめに

本演題は、ウクライナ戦争が始まって一年半という時代を背景に、高村光太郎と谷川俊太郎を取り上げて、今書くことについて考える。「戦後の谷川俊太郎」とあるが、これは「戦後の私達」と読み替えてもいい問題でもある。

キーワードは、藤井貞和『言葉と戦争』（大月書店２００７）に所収論文「戦争責任論争と問題点」より、「戦争をあおりたてるような作品を書いたか、書かなかったかのレベルが問題なのではなく、作品一篇に内面の省察がどこまで深く遂げられているか、否か、ということが、たしかに、戦争責任論の核心であるにちがいない。だから、作品一篇に内省なくして、国家の詩を書きうる人は、戦後の人民の詩を書くこともできるのであって、そのようなよこすべり的文学状況が臆面もなく横行してゆくところにこそ、文学的近代の弱点が露呈されている」。（傍線・引用者）。つまり、今は逆に戦後の人民の詩を書くことが、時代の先にどんなよこすべりを起こすことになるのか立ち止まってみることが必要なのではないかと思う。

Ⅱ高村光太郎の戦後

『道程』や『智恵子抄』の後、光太郎は、戦争協力詩を書く。「戦ふ一億は真実の詩を渇望してゐる。みづから身心に痛感しながら此を口にするすべを知らない一億自身の詩に言葉を与へるためには、詩人みづからが真に戦ひ、真に行ひ、真にまことを以て刻々に厳毅精詣を期せねばならない。」（「戦争と詩」より部分・「日本読書新聞」昭和19年1月29日）という信念の下、真珠湾攻撃を讃える「十二月八日」や「彼等を打つ」など次々と発表し、終戦を迎える。

今回注目したいのは、贖罪のために花巻で、農耕自炊生活を七年間送り、その生涯を「一つの愚劣の典型」として自己批判した「暗愚小伝」二十編を書いたことである。のちに詩集『典型』に収められた。

「すつかりきれいにアトリエが焼けて、／私は奥州花巻に来た。／そこであのラヂオをきいた。／私は端坐してふるへてゐた。／日本はつひに赤裸となり、／人心は落ちて底をついた。（「終戦」より）」。

中村稔は『高村光太郎の戦後』（青土社）の中で、この贖罪の行動を重く受け止める。反省の弁もなかった斎藤茂吉と比較して、人間・光太郎が見えてきたのだろう。

Ⅲ戦後の谷川俊太郎

湾岸戦争時の「鳩よ！」（１９９１年５月号）の特集「湾岸の海の神」では、それぞれの立場による詩が寄稿された。そして、多くの論争を生むこととなった。その経緯については、同年の「現代詩手帖」７月号に詳しい。

谷川の「我慢」は、他国の戦争に無頓着になりがちな一般人を代弁するかのような作品となっている。そして、現在もそれは何ら変わらない。そのような意味でも、中立でクレバーな立ち位置にいるといえるだろう。「テレビをおかずに今日もぼくは飯を食う／死ぬまではどんなことが起ころうと／ふだんと同じように飯を食いクソをさせてもらう／砂漠の兵隊たちだってそうするしかないにちがいない／／その合間にミサイルも射つのだろうが／それはもちろん敵味方ともに信念に基づいて射つのである／ぼくにはそんな信念の持ちあわせがないから／うろうろしながら我慢しているだけ（以下略）」

確かに正義の戦争というものはない。どちらも自国の信念に基づく。だから、部外者は見て見ぬふり。文学に政治は持ち込まない。それは、ある意味正しい。しかし、それだけでいいのか。人間の問題としては無視できないのではないだろうか。

Ⅳおわりに

何を書くのか。それは、もちろんそれぞれの書き手が考える問題だと思う。時代の痛みをどのように捉えるのか、めざす自己の文学はどこにあるのか。いろいろな芸術の分野の中で、詩にしかできないこと。そして何より、自分の人生の中で何を表現したいのか、と。

追悼・平田好輝さん

平田好輝さんが5月1日(月)午前9時50分に自宅にてお亡くなりになりました（享年87歳）。慎んでお悔やみ申し上げます。

【略歴】
日本文芸家協会、横浜詩人会、日本現代詩人会　各会員
詩、小説、評論を数多く発表。
昭和音大、かながわ県警察学校、関東大学女子短大等々で文学の講座を持ち、招きに応じて講演活動。
詩集…『滑走路』、『盲目飛行』、『わずかなとき』、『日を享けて』、『アネモネと斧』、『みごとな海棠』、『恩師からの手紙』、『海は遠いものに』
評論…『智恵子と光太郎』
短編小説集『平田花の木から』
小説集…『孤独の舟』
随筆集…『父の夢』、『狭い部屋』

舟

平田好輝

舟がなつかしいのは
ひとつの重みのせいだ

舟が
夜明けの海に
沈んでしまったとき
空と海があかくただれていて
海はまるで
妊婦のように
ふくらんでいた

舟は
沈むだけの理由があるので
静かに
垂直に
沈でいったが

そのとき
べつの舟をこいでいたわたしは
ひとつの重みを知りそめ
舟の全体が
なつかしく
わたしの中に
かたちを絶やさない

平田好輝さんの金庫

荒船健次

平田好輝さんのご逝去を心よりお悔み申し上げます。平田さんとは私が高校生の三学期に出会った。漢文の授業の合間に平田先生は著名な詩人に最近会ったことを誇らしげに話した。高校卒業後、中学の級友で俳人になった早熟な彼に連れられ、平田さんを訪ねた。平田さんは当時「潮流詩派」(村田正夫氏主宰)の同人だった。二人が訪ねた前日の夜、同人会に出席した平田さんは、会の様子を興奮冷めやらない口調で話した。私が詩を書く決意をした頃だった。詩を書く人達の交流とはそんなにも気持を高ぶらせる歓びがあるのか、と平田さんの話を聞き思った。平田さんは早稲田の文学部で森鴎外と高村光太郎の研究をした。修士を終え、高校の教師をしながら、詩を書いてきた。同世代の寺山修司や三木卓に刺激され、小説家を目指した時期もあったが、結局詩が平田さんの性格に適していたようで、以後詩に専念。亡くなる寸前まで詩誌「青い花」の同人として詩を発表した。平田さんと酒席で話をしていた時、彼は詩を書きあげると金庫に仕舞うと話された。お金よりも詩を金庫にしまう人であるのかと感心した。平田さんは休日、大抵外出し、喫茶店で詩を書き、奥様に必ず葉書を出すと話した。今迄どれほど沢山奥様に葉書を出したことか。平田さんとは一時期、詩誌「海潮」で一緒だった。「海潮」の資金は野沢郁郎さんが大部分提供された。今辻和典氏(故人)は中国の詩に関する紹介、佐川亜紀氏は韓国の詩の情報を旺盛に発信した。一方平田さんは詩を沢山発表した。平田さんの詩は軽妙、ユーモアに富み、市井の機微を平易な言葉で温か実があり、平田さんの人柄そのものだった。四年前に病に倒れ、自宅で大好きな本に囲まれ、晩年を穏かに過ごされたと画家の奥様が話された。平田さんむこうの世界でも温かい詩を沢山書いてください。　合掌

追悼・三上透さん

三上透さんが6月26日13時43分に済生会中央病院にてお亡くなりになりました(享年64歳)。慎んでお悔やみ申し上げます。

【略歴】
昭和五十三年　富山大学人文学部地理学コース入学
昭和五十七年　富山大学人文学部地理学コース卒業
昭和五十七年　東芝情報機器（株）入社
平成三十一年　東芝ソルージョン定年退職
平成三十一年（令和一年）より（株）ワークビジョン（東芝ソルージョンより改名）勤務
所属詩誌　昭和六十二年「浮遊」九号から同人として参加。
「山脈」同人
日本詩人クラブ　横浜詩人会　各会員

【詩集】
1982年『透明なキャプテン』（富山印刷所）
1994年『22篇のおとぎばなし』（ふらんす堂）

片道切符

三上透

歩道にやけきの葉が
舞っていた
話したいと望むから
言葉は
枯れ始める

僕の
流れるような川筋に
（それはあるのだろうか）
並木は
語ってくれるだろう
流れることが
彼等の
単純で豊かな生き様
そして
確かな歩みだ

両手で枯れた言葉を
置いてみる

僕は
自身の体が
葉脈に支配され
自分の言葉を
語り始めるのに気付く
（日々は簡単に裏返る）

並木の流れを亘る
黄色く色付いた線路に
さり気なく
片道切符の
乗越しをしてみた

再会叶わず、寂しさだけが残る

金井雄二

長らく同人雑誌「山脈」で活躍されていた三上透さんが亡くなられた。職場で倒れられ、そのまま脳死状態で病院へ運ばれたそうだ。それから一週間、意識はとうとう一度も戻らなかったという。ご冥福を祈る。

確か、ぼくと同年生まれだったと記憶しているから、六十四歳のはずだ。まだまだ若い。本当に残念である。

若い、といえば、ぼくと三上さんとは若い時に出会った。詩を書きだしてすぐの頃だったから二十五、六歳の時ではなかっただろうか。長田典子さんが中心となって活動していた雑誌「浮遊」の同人だった。どこかで「浮遊」を読んだらしく、八号のときに、投稿で詩が載っていて、九号から同人となった。ぼくは二号からの参加だった。創刊が一九八三年で、一九八七年の十二号で終刊となる。わずか四年足らずの雑誌。そのなかで三上さんとは二年ほどの付き合いだったことになる。

「浮遊」の同人会では意見も活発にでた。三上さんは、斜めからのぞき込むように視て、はっきりと自分の意見を言う人だった。ムダなことはしゃべらなかったが、詩について話すことが楽しいという感じだった。根はシャイな人であったと思う。「浮遊」解散後、どのような形で詩を書いていこうかというときに「山脈」に誘われたのではないだろうか。その後はぼくとも音信が途絶えてしまった。

今年度、横浜詩人会賞の選考委員をお願いした。久しぶりに三上さんにお会いできるのを楽しみにしていたのだったが、それが叶わなかったのが寂しい。

彼の詩集『22篇のおとぎ話』の中に「片道切符」という詩があり、次のように書かれている。

僕は／自身の体が／葉脈に支配され／自分の言葉を／語り始めるのに気付く

もう一度、三上透さんと語り合いたかった。

追悼・森口祥子さん

森口祥子さんが5月28日にお亡くなりになりました。慎んでお悔やみ申し上げます。

【略歴】
一九四十年　埼玉県生まれ
横浜市立大学医学部卒業。精神医学専攻
昭和四十一年　高田敏子主宰「野火の会」同人
昭和四十七年「青い階段」創刊同人
所属詩誌「青い階段」「冬至」同人
日本詩人クラブ　横浜詩人会 各会員

【詩集】
一九八七年『状況』（花神社）
一九九三年『海は未来である』（横浜詩人会）
二〇〇〇年『終りの冬』（神奈川新聞社）
二〇〇〇年『ガラスの天井』（横浜詩人会）
二〇〇七年『冬の薔薇』（成巧社）
二〇一一年『風は昼さがりに』（土曜美術社出版販売）
二〇一七年『バス停にて』（土曜美術社出版販売）

炬燵

森口祥子

風化の舞う如月
夕餉は炬燵で
湯豆腐の湯気をまとった箸を
　とり
ぬるめの酒は五勺ずつ

連れ添ってほぼ五十年
華やいだ団欒（まどい）は遠い日のこと
あれも贅沢だったと
刻（とき）をいとおしみながら

冬蝶を見た話などする

変わらないね　わたしたち

森口祥子第六詩集
『風は昼さがりに』より

稀有の人— 森口祥子氏に寄せて

青い階段　廣野弘子

隣り合わせになって、自己紹介をした。森口祥子さんと私の出会いである。高田敏子主宰の「野火の会」第二回例会。昭和四十二年四月十日。五十六年前の事である。医師を目指している主婦であり、子育て只中にある女性。確かインターン時代であったと記憶している。そんな忙しい女性が詩をも書こうとしている。小柄な身の内に、秘めた情熱を抱いているらしい女性の傍で私は居心地が悪かった。詩への想いの違いであったろうか。にも拘わらず、顔見知りの安心感からか例会では並んで座った。右隣りには、房前玉枝さん。故人になってしまわれたが浅野章子さんと「青い階段」を立ち上げる際に声をかけてくれ創刊メンバーに名を連ねる事になる。森口祥子さんと同人としての新らたな旅立ちでもあった。

森口祥子さんは多忙を走り続けている時期でもあり、時々合評会を欠席していたように思うが、信念の揺るぎない人。詩への姿勢を崩す事はなかった。

芯の強さを静かに事物へ向け職業柄の葛藤、日々の生活、自然への憧憬を丁寧に掬い描いて来た。彼女の詩には五感がある。五感なくば、人は人として成立しえない事を誰よりも識っている「文系医者」と、お子さん達から揶揄されるのだと笑って話されていた。わりに若い頃にお母様を亡くされていて、詩への直向きさは、その辺りが源ではなかったろうか。彼女の第一詩集「状況」のあとがきには—内にある感情の起伏を詩にうたってみたいと思い続けてきた—

激しさを表面に出さない方だと自らを分析している。人の警戒心をも溶かしてしまう輝く瞳の持ち主であった彼女。その瞳を突然に閉じて、逝ってしまった。青い階段の雑事を一身に熟し、存続に尽力してくれた。よもや、感謝の言葉を伝えぬまま別れが来るとは。うろたえつつ悲しみの深さに耐えている。

人柄そのまま、媚びたり阿ねだりしない、実に欲のない詩群を遺した。懐かしさの香り漂う稀有の人。出会い、共に歩めた。望外の喜びです。安らかであれ。

《会員消息》（順不同・敬称略）

【入会】
伊東友香

【逝去】
三上透
村山精二（次号に追悼記事）

【名簿追加】
伊東友香

【名簿変更】
真宮治郎（前号（327号）掲載の新住所の末尾に追加）久島方
光冨幾耶（携帯電話変更）090―9137―7804（新）

【会員の受賞情報】
第19回日本詩歌句随筆評論大賞詩部門・土曜美術社賞
草野早苗詩集『祝祭明け』
第19回日本詩歌句随筆評論大賞詩部門・特別賞
佐相憲一詩集『サスペンス』

【新聞記事】
「神奈川新聞」文化時評 現代詩（毎月第1木曜日）光冨幾耶

【会員の詩書と参加詩誌など】

【詩集】
伊東友香『神さまのいない場所で』（中央公論新社）
関中子『真夜中待ちまち』（神奈川新聞社）
伊藤悠子『白い着物の子どもたち』（書肆子午線）
若尾儀武『戦禍の際で、パンを焼く』（書肆子午線）
中村吾郎『かいの人々―ふようのみね―』（甲斐書房）
井嶋りゅう『影』（文化企画アオサギ）

【詩論集】
佐相憲一『生きることと詩の心』（土曜美術社出版販売）

【詩誌など】
「いのちの籠」54号　佐川亜紀
佐相憲一　奥津さちよ
「回游」78号　磯崎寛也
富永たか子　関中子　原田もも代
「gaga」25号　相原京子
「交野が原」95号　野木京子
福田拓也　佐川亜紀　佐相憲一
金井雄二
「カナリア」6号　服部剛
「かねこと」23号　金井雄二
「京浜詩派」243号　荒波剛
梅津弘子　洲史　高細玄一
「現代詩手帖」7・8・9月号
中島悦子　野木京子
「左庭」53号　伊藤悠子
「Σ詩ぐ魔」6号　佐相憲一
「詩人会議」7・8・9月号
梅津弘子　高細玄一　洲史
いだ・むつつぎ　佐相憲一
中上哲夫　佐川亜紀
「詩人の輪通信」56号　梅津弘子
「詩と思想」7・8・9月号　服部剛
奥津さちよ　関中子　田中裕子
佐川亜紀　光冨幾耶　中村不二夫
佐相憲一
「指名手配」7号　井嶋りゅう
井上摩耶　佐相憲一
「抒情文芸」187号　野木京子
「space」170号　中上哲夫
草野早苗　木島章
「タルタ」60号　田中裕子　堀内敦子
「タンブルウィード」14号　鈴木正枝
野木京子　多田陽一　田尻英秋
若尾儀武　立木勲　柴田秀子
「地下水」248号　林柚維
うめだけんさく　鎮西貴信
村上きょうこ　新沢まや
森川芳州　方喰あい子　保高一夫
「地平線」74号　中村吾郎
「潮流詩派」273号　相原京子
中上哲夫　山本聖子
「とんぼ」16号　服部剛
「波」23号　村山精一
「日本現代詩人会報」171号
長田典子　大石規子　荒船健次
「ひょうたん」80号　山田玲子
「伏流水通信」90・91号
うめだけんさく
「フラジャイル」17・18号
佐川亜紀　福田拓也
「別冊　詩的現代」2023夏
相原京子　中村不二夫
「PO」190号　関中子
「MY DEAR」328号　井嶋りゅう
水無川渉　紗野玲空
「真白い花」29号　中山直子
「みらいらん」12号　柴田千晶
「4B」23号　福原恒雄
「龍」163号　松浦成友
「竜骨」122号　奥津さちよ　小林妙子

【通信担当よりお願い】
☆「会員の詩書と参加詩誌など」欄に掲載ご希望の方は通信担当までお知らせください。詩集・詩誌などを送る際、詩集は「表紙と奥付」、参加詩誌は「表紙と目次、発表作品の頁」をコピーして郵送、スキャンあるいは写真に撮ってデータをメールで送ってください。
郵送先：〒251―0052
藤沢市藤沢1―11―6　光冨幾耶（みつとみいくや）
E-mail: mitsupoetry@gmail.com

【編集後記】
横浜詩人会賞は、佐野豊さんに決定されました。これからのご活躍を期待しています。
また、新しい方の入会や複数の方の詩集賞の受賞などうれしいニュースもありました。
一方、平田好輝さん、三上透さん、森口祥子さんがご逝去。また村山精二さんが急逝され、次号に追悼記事の掲載となりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。（光冨）

詩人会創立　1958年10月25日
通信創刊　1961年2月10日
会員数　110名